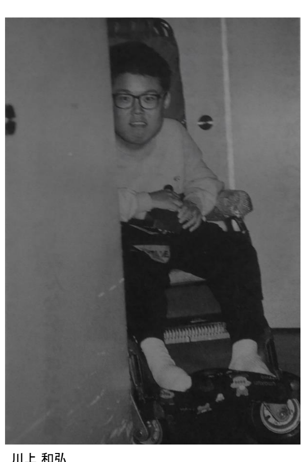
第9詩集「今、この時を」より



川上 和弘
1973年　3月　徳島県で生まれる。
1982年　3月　国立療養所徳島病院に入院。

ポコ ポコ
～みんながポコポコ編～

あっちにポコポコ
こっちにポコポコ
みんなこっちに歩いてきてる
なんだか気持ちが悪い

僕はふと　気がついた
大きな海があれば
小さな川もある
大きな山があれば
僕みたいなちっこい山もある
それぞれみんな個性を持って生きている

君は大きな山なの？
君は何も答えない・・・
ただまっすぐ歩いているだけだった

あっちにポコポコ
こっちにポコポコ
ピクッ！　グングングングン
アッ！　イッチャッタ

ポコポコ
～大きくなりたい編～

大きくなりたいよう
デカくなりたいよう

僕が小さいころ思っていた
いつか僕も大きくなって
立派なお父様より
もっと　もっとでかくなるんだとね
しかし・・・
君も　君も　お前も　お前も
こんなに　こんなに　大きいのに

僕はどうして小さいのだろう
おまけに僕の子供にまで
追い越されてしまった

大きくなりたい
デカくなりたい
僕の願望は永遠に続く

ポコ　ポコ
～僕の白い景色編～

アッ！今日もやって来た
プルルン　プルルン　プルルン

この白い景色を見ている僕は
何だかうれしそう
君達や　お前達は
たぶん知らないと思うけど

見ているだけで
とっても元気がでるんだよ

こんなに近い距離なのに
怖くてさわれない
だけど僕は勇気をだして
その白い景色をさわってみた
すると・・・
やわやかくてとっても気持ちよかった
僕は完全に元気が・・・でちゃった
プルルン！

ガッタン　ゴットン

ガッタン　ゴットン　ガッタン
今日はどこまで行くの
この道続く限りどこまでも
となり町に着けば
寒い雪降る町
またそのとなり町に着けば
熱い砂漠の町
僕はいろんな町を見た
そして
君のいる町も知っている

いつか見知らぬ君と出会ったら
声をかけてよ　心から

ガッタン　ゴットン　ガッタン
ガッタン　ゴットン　ガッタン・・・

何もない明日へ

ドドドドドドーッ、ドドドーッ
気持ちいい音だ
なんだか眠くなってきた
人はこの音のことを「雑音」
と、言うのだ

ドドドドドドーッ、ドドドーッ
いい感じだ
みんなも感じるだろ
この刺激がたまらんのだ

あーっ、この刺激のない生活
うんざりだ
何か感じる事がしたい・・・

そして今日が終わり
また明日が訪れる
ドドドドドドーッ、ドドドーッ

パウパウ

僕は言った
「ずっと君を追い掛けるよ」
君のパウパウ追ってどこまでも

君がいなけりゃ・・・。
たぶん　僕は
ほかのパウパウを追い掛けるだろう
だけど今は君がいる
僕は君が好きだし
君のパウパウがもっと好きだ

僕は君と出会えてよかったと思う
君のパウパウにも会えたから

僕は思った
「これからも君を追い続けるよ」
君のパウパウ追って・・・

僕のきらいな君

ジンジンジンジン
ジーン、ジーン

僕は君と仲よくしたくないんだ
「あっちにいっておくれ」
だけど君は離れない

僕はたまらず
身体を斜めによけた
君はいなくなったけど
今度は僕の身体が
こ、こ、こけちゃった
「だれかおこしてちょうだい」
よっこらしょ

結局
僕と君はいつも一緒なんだ

ジンジンジンジン
ジーン、ジーン

ろくなもんじゃねぇ
～ぴーぴー編～

グググゥー　グググゥー
おなかがいたいよう　おなかがいたいよう
今日のボクのおなかはごきげんななめ
今日はおバカさん
明日はどうだろう？

かしこくない子は今日のごはんはぬきよ！
と言ったらボクもつらいし
おなかがいたくても
ボクがつらい
どうすれば・・・
どうすればいいのか・・・

こうしよう
おなかのぶぶんをハサミで切っちゃえ
チョキチョキ　チョキチョキ
切っちゃったら死んじゃった

はらっぱのまんなかで

はらっぱのまんなかで
夜空を眺める僕
星たちは僕がいる☆を見下ろしてしる
僕は何故かとどまっている

僕は夜空を見上げた
きれいな星が右から左へと
まっすぐ走って行った
その時僕はかすかに聞こえた
「君達が住んでいる星はもうすぐ死ぬよ」

僕はふと夜空を見上げた
すると・・・
きれいなお空に
ポッカリ穴があいていた
僕は掃除機に吸い込まれるゴミのようになった・・・

はらっぱのまんなかで
僕はおっもいっきり息を吸った・・・

かくれんぼ

もういいかい　まぁだだよ

小さい頃
僕の一番好きだった遊び
小さいおばあちゃんと

一番よくした遊び

小さいおばあちゃんは
僕の知らない間に
どこか遠くへ行ってしまった
周りの人は
「とても楽しいところへ行ったんだよ」
と言っていた・・・

だけど僕は知っている
どこかに隠れて
僕を見ていると

もういいかい　まぁだだよ

まっくろじいちゃん

ビュービュービュー
来たからこんにちは
今年もやって来ましたこんにちは

僕の想い出
そこからじいちゃんふってきて
ドッカーン
しりもちついたじいちゃん
じいちゃんはなぜか
えんとつにはいるのがすきなんだ
そしてえんとつであそびおわると
まっくろになったじいちゃんは
いくつもくつしたわすれてかえっていくんだ

靴下の中身は何だったんだろう？
それは子供たちの夢がつまっている宝物

甘い涙

空から涙が降ってきた
僕の頭の上に降ってきた
ポタ、ポタ、ポタッ
涙が口の中に入ってきた
口の中でべろ舐め回した
甘くてやさしい味がした

僕はハンカチを手にして
空へ向かって手を伸ばした・・・
君は　かわいい瞳(め)をして
エクボを見せてくれた

今日の空はいつもになく澄んでいた

笑って「オ・ハ・ヨ・ウ」

その笑顔そのお尻その声
それはまさしく君であった
「おはよう・・・」　ニコッ

朝のなにげない挨拶
なんて清々しいのだろう
君は笑顔を見せて挨拶をこの僕に
僕ももちろん笑顔で答えた
そんな朝の一時は
僕が一番優しくなれるのだ

ニコッ
ニコニコ
ワハハハッ

日曜のある晴れた日

こんなに天気の日には
ポカポカと暖かいし
風はきもちいいし
芝生の上で
手をのばし　足をひろげて
気持ちよく
昼寝をしたいもんだね
グーグー　グーグー

こんなにきれいに晴れた日には
ポカポカ暖かいし
風はさやかだし
寝るのにはもったいないね
やっぱり　身体を動かして
気持ちよく
汗をかきたいもんだね
イチニイ　イチニイ

目覚め

ある朝僕は君のことを考えた
僕はこんなに君のことが好きなのに
君はどう想ってくれているんだろう
なんだか胸が苦しい

今急に君の一番すてきな笑顔が浮かんだ
君は歯を白く光らせ
僕の目を見つめて手を握った
顔をまっ赤に染めている僕が
すごく可愛く思えた

朝焼けが登る頃
僕は君の笑顔で目覚める
今日は君の笑顔で僕の一日が始まった
なんだか良い事がありそうな予感

空と雲と君

僕は暖かい太陽と
緑の草たちに包まれて
ふと空を眺めた

君と出会ったあの日
今日のように晴れた青い空だった
雲はゆるやかに風に流されて
君の着ていた白いTシャツが
やけにマッチして
君の笑顔が輝いて見えた
あのすてきな笑顔は
あおのすてきな笑いは声は
どこにいってしまったんだろう
君は僕を捨てて消えてしまったのか

またふと僕は空を眺めた
僕の頬には一粒の悲しい雨が降っていた

泣きたい

全てが嘘だった
君の愛も笑顔もみんな
僕を見捨てないでおくれ

みんなに笑われた
僕のすることなすことみんな
僕を笑わないでおくれ

ねぇ　こっち向いてよ
　好きだから
ねぇ　好きと言ってよ
　嘘でもね

だけど・・・
泣きたい泣きたい
泣きたい時には
泣いちゃえ泣いちゃえ泣いちゃえ
僕の好きなようにやらせておくれ

誰もが経験する解放感

僕は一生懸命生きている
僕は一生懸命楽しんでいる
僕は一生懸命悲しんでいる
僕は一生懸命気張ってる

いつの日か僕は
あの時の苦痛を忘れてた
涙流してこの掌を握り締め
苦痛と戦った
僕はその時の涙を忘れない

ホッ！

最後まですべてを出し切った
僕は涙を流して喜んだ
やりとげた後の解放感
まるで僕の身体が軽くなった気分だった

だけど僕は嫌だ
あんな経験はもう二度としたくない

僕は一生懸命生きている
僕は一生懸命楽しんでいる
僕は一生懸命悲しんでいる
僕は一生懸命気張ったゾ

今日の僕はなんだかスッキリ
今日も一日ガンバルゾ

ありがとう・これからも

毎朝看護婦さん
僕達のうんこを取ってくれて
いつもスッキリしています

風をひいてしんどい時
看護婦さんの笑顔見るだけで
とても元気が出るんです
ありがとう　ありがとう
ずっと僕達守ってくれて
これからも　これからも
ずっと僕達よろしくお願いします

すてきな出会い

君と出会って一年
僕は楽しく過ごせたよ
そして　いろんな人に
笑ってもらえたり
生まれて初めて人に認めてもらった
僕は嬉しいよ・・・心から

君は僕の身近なところから
生まれ、現れ
僕を救い
大切な事も教えてくれた
僕の全ては君だった
これからも僕は君と一緒だ

そして一緒に行こう
最後のゴールまで